

歴代誌第二1-5章「神殿の完成」

1A 神殿建設の準備 1-2

1B 祈り 1

2B 友好関係 2

2A 神殿建設の模様 3-4

1B 神殿内部 3

2B 庭 4

3A 神の箱の移動 5

本文

歴代誌第二1章を開いてください。ついに、歴代誌の第二に入りました。歴代誌は、サムエル記と列王記と同じ時代を取り扱っている書物で、同じ出来事ですが、異なった視点で、はっきりとした目的をもって書いています。それは、「ユダヤの民が礼拝をする民なのだ」という強い信条です。神殿を再建させ、礼拝を取り戻す時に、自分たちの歴史を見直して何を拠り所としなければいけないのかを思い巡らすための書物です。

歴代誌第一は、ダビデがレビ人を使って礼拝と礼拝における賛美を確立すべく奔走したことがクライマックスとなりました。そして第二は、その息子ソロモンが神殿を建て、そこでの礼拝が代々のユダの王によってどのように死守され、また失われていったのかを描いています。私たちはすでに、歴代のユダの王の歴史を見ましたが、彼らがどのように礼拝と主への祭りを守ったかについては列王記には書いておらず、歴代誌にのみ書いてあります。ということで、私たちは再び、礼拝とその賛美という中心テーマをもって第二の歴代誌を読んでいくことになります。

1A 神殿建設の準備 1-2

1B 祈り 1

1:1 さて、ダビデの子ソロモンは、ますます王権を強固にした。彼の神、主は彼とともにおられ、彼を並みはずれて偉大な者とされた。

ソロモン王の業績は、1章から9章までに書いてあります。そこでの証しは、「主が彼とともにおられて、彼が並はずれて偉大な者となった」ということです。

1:2 ソロモンは全イスラエル、千人隊、百人隊の長、さばきつかさ、および一族のかしらである、全イスラエルの上に立つ者すべてに向かって語り、1:3 ソロモンおよび彼とともにいた全集団はギブオンにある高き所に行った。そこには、主のしもべモーセが荒野で造った神の会見の天幕があったからである。1:4 ..しかし、神の箱については、ダビデはこれをキルヤテ・エアリムから、ダビデがそのために定めておいた場所に運び上らせた。箱のために天幕をエルサレムに張っておいたからである。

1:5 また、フルの子ウリの子のベツアルエルが造った青銅の祭壇を主の幕屋の前に置き、ソロモンと会衆は主に求めた。1:6 ソロモンはその所で主の前にある青銅の祭壇の上に…その壇は会見の天幕の所にあった。…いけにえをささげた。すなわち、その上で一千頭の全焼のいけにえをささげた。

ダビデのところには、彼を支えるつかさたちがおり、また千人隊、百人隊などのつかさも来て、そしてダビデは最後の言葉を残しましたが、ソロモンのところにも来ています。そして、彼らはギブオンモーセの幕屋のところに来ています。ここで歴代誌の著者が、モーセの幕屋を強調しているのは、ここからついに、主の選ばれる場所での礼拝が始まるからです。イスラエルの歴史において、ついに神の安息、そして平和が得られる神殿が建てられることとなります。

1:7 その夜、神がソロモンに現われて、彼に仰せられた。「あなたに何を与えようか。願え。」

大勢の人々がソロモンと一緒に、祭壇の前でいけにえを捧げましたが、主はソロモンが一人になっている時、夜に、彼に語りかけられました。興味深いことに、ニコデモがイエス様のところに一人で行った時も夜でした。主との一対一の会話が始まります。

1:8 ソロモンは神に言った。「あなたは私の父ダビデに大いなる恵みを施されましたが、今度は父に代わって私を王とされました。1:9 そこで今、神、主よ、私の父ダビデになされたあなたの約束を堅く守ってください。あなたは、地のちりのようにおびたしい民の上に、私を王とされたからです。1:10 今、知恵と知識を私に下さい。そうすれば、私はこの民の前にはいりいたします。さもなければ、だれに、この大いなる、あなたの民をさばくことができますでしょうか。」1:11 神はソロモンに仰せられた。「そのようなことがあなたの心にあり、あなたが富をも、財宝をも、誉れをも、あなたを憎む者たちのいのちをも求めず、さらに長寿をも求めず、むしろ、私があなたを立てて私の民の王としたその民をさばくことができるようにと、自分のために知恵と知識を求めたので、1:12 その知恵と知識とはあなたのものとなった。そのうえ、私はあなたの前の、また後の王たちにもないほどの富と財宝と誉れとをあなたに与えよう。」1:13 こうして、ソロモンはギブオンにある高き所から出て行き、会見の天幕の前を去ってエルサレムに行き、イスラエルの王となった。

ここでソロモンが求めたことは知恵であり知識ですが、それは彼の名前と関係することです。主がダビデに対してソロモンについて約束された言葉がこれです。「見よ。あなたにひとりの子が生まれる。彼は穏やかな人になり、わたしは、彼に安息を与えて、回りのすべての敵に煩わされないようにする。彼の名がソロモンと呼ばれるのはそのためである。彼の世に、わたしはイスラエルに平和と平穩を与えよう。彼がわたしの名のために家を建てる。彼はわたしにとって子となり、わたしは彼にとって父となる。わたしはイスラエルの上に彼の王座をとこしえまでも堅く立てる。』(1歴代 22:9-10)」ソロモンは平和を確立し、彼の統治する国は平和と繁栄で満ちます。そして、皆が戦いを終え、安息に入ることができます。その中心が神殿であります。

これが、まことの知恵であります。イエス様は、「見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるの

です。(マタイ 12:42)」と言われました。イエス・キリストを頭とする神の家、教会には、神の知恵が与えられています。「しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。(1コリント 2:6-7)」私たちキリスト者が、この世の知恵ではなく、神から与えられる知恵に留まるとき、私たちの間にも約束されているキリストの平和を享受することができるのです。

ソロモンは、このギブオンにおける神の語りかけによって、初めてイスラエルの王としての役務を果たすことができました。

1:14 ソロモンは戦車と騎兵を集めたが、戦車一千四百台と、騎兵一万二千人が彼のもとに集まった。そこで、彼はこれらを戦車の町々に配置し、また、エルサレムの王のもとにも置いた。1:15 王は銀と金とをエルサレムで石のように用い、杉の木を低地のいちじく桑の木のように大量に用いた。1:16 ソロモンの所有していた馬は、エジプトとケベの輸出品であった。それは王の御用達が代価を払って、ケベから手に入れたものであった。1:17 彼らはエジプトから、戦車を銀六百、馬を銀百五十で買い上げ、輸入していた。同様に、ヘテ人のすべての王も、アラムの王たちも、彼らの仲買で輸入した。

主がソロモンに、「富と財宝と誉れとをあなたに与えよう。」と言われたその約束がどのように実現したかを、歴代誌の著者は残しています。しかし、ソロモンが行ったことには問題があります。申命記 17 章 16-17 節に、イスラエルの王が他の外国の王が行っていることでも行っていけないこととして、主はこう語られています。「王は、自分のために決して馬を多くふやしてはならない。馬をふやすためだといって民をエジプトに帰らせてはならない。「二度とこの道を帰ってはならない。」と主はあなたがたに言われた。多くの妻を持つてはならない。心をそらせてはならない。自分のために金銀を非常に多くふやしてはならない。」これらを、ソロモンはすべて行ってしまいました。特に、馬を持つことはダビデも戦っている時に、敵どもの戦車の馬の筋を切って、決して馬に頼らないようにしていました。それが、イスラエルの神に拠り頼むことのできなくなっていたからです。

ここから私たちが学ぶ教訓があります。主は、私たちに大きなものを任せてくださいます。この方を求めれば、それだけ忠実な者に任せてくださるようになります。しかし、そこでその任されたものを自分のものにしていく、あるいは、それらの祝福を主よりも大事にしていく誘惑があります。今、ドラマ「八重の桜」が流行っていますが、日本にある数々のミッション系の大学は世俗化してしまいました。初めは、聖書を教え、福音を伝えるための学校だったのに、その経営がうまくいって大きく、有名な大学になり、それでキリスト教の教えは、確かにありはするのですが、福音を信じる者たちの集まりではなくなっています。平和と繁栄の中にある霊的危機であります。

2B 友好関係 2

2:1 さて、ソロモンは主の名のための宮と自分の王国のための宮殿とを建てようと考えた。2:2 ソロ

モンは、荷役人夫七万人、山で石を切り出す者八万人、彼らを指揮する者三千六百人の人数をそろえた。

ソロモンは国内で神殿建設、また宮殿の建設のための工事をする者を集めました、それだけでは足りないことを悟りました。

2:3 ソロモンはツロの王フラムのもとに人をやって言わせた。「あなたが私の父ダビデに行ない、父の住む家を建てるための杉材を送ってくださったように、私にもしていただけないでしょうか。2:4 実は、私も、私の神、主の名のために宮を建てて、これを主にささげ、主の前にかおりの高い香をたき、パンを常に並べ供え、また、朝ごと夕ごとに、また安息日ごと新月の祭りごとに、私たちの神、主の例祭ごとに、全焼のいけにえをささげようとしています。このことは、とこしえにイスラエルに命じられているのです。2:5 私が建てる宮は壮大な宮です。私たちの神は、すべての神々にまさって偉大な神だからです。2:6 天も、天の天も主をお入れできないのに、いったいだれが主のために宮を建てる力を持っているのでしょうか。また、主のために宮を建てるというこの私は、いったい何者でしょう。ただ主の前に香をたくためだけの者です。

すごいことです、フラムは異教徒です。イスラエル人ではありません。けれども、ソロモンは今、自分が置かれている霊的事情を有体に、彼に伝えています。なぜなら、ダビデの時にフラムは、主の証しを数多く聞き、それでイスラエルの神に対する強い尊敬を抱いていたためです。それで、ソロモンはそのまま、主のための神殿を建てることを伝えることができました。

ソロモンが伝えている中で、これは壮大な宮になると言いつつも、まったく無比である無限の神の前でいったい自分が何をしているのか、とつぶやいています。この中に神をお入れするなんていうことは決してできない、ただ主の前に香をたくためだけなのだ、と言っています。今、観測可能な宇宙の大きさは、465 億光年です。光年というのは、一年間に光が進む距離ですが、それが 465 億倍あるということです。けれども、それも観察可能だということだけで、観測できないところを含めたらどうなるか、文字通り天文学的數字になります。私たちの主は、「天の天もお入れすることはできない」ほど大きな方です。そしてキリストは、この天をお造りになった方であり、神の御子であります。

2:7 そこで今、私のもとに、金、銀、青銅、鉄の細工に長じ、紫、紅、青などの製造に熟練した人で、各種の彫り物の技術を心得ている人を送ってください。私の父ダビデが備えておいたユダとエルサレムにいるこちらの熟練した者たちもいっしょに働きます。2:8 それから、私のもとに、杉、もみ、びやくだんの木材をレバノンから送ってください。私はあなたのしもべたちがレバノンの木を切ることに熟練していることを知っております。もちろん、私のしもべたちも、あなたのしもべたちといっしょに働きます。2:9 私のために、木材を多量に用意させるためです。私の建てる宮は壮大であり、みごとなものだからです。2:10 お聞きください。私は、木を切り出し、材木を切る者たちのため、あなたのしもべたちのために食糧として小麦二万コル、大麦二万コル、ぶどう酒二万バテ、油二万バテを提供します。」

熟練工、また木材、それから木材を切る労働者らへの食糧の供給を約束しました。

2:11 ツロの王フラムは文書を送ってソロモンに言った。「主はご自身の民を愛しておられるので、あなたを彼らの上に立てて王とされました。」2:12 さらに、フラムは言った。「天と地とをお造りになったイスラエルの神、主はほむべきかな。主はダビデ王に、思慮と悟りとを備えた知恵ある子を授け、主のための宮と、自分の王国のための宮殿とを建てさせられるのです。

フラム王自身が、イスラエルの神をほめたたえています。そしてソロモンに与えられた知恵を認めています。

2:13 今、私は才知に恵まれた熟練工、職人の長フラムを遣わします。2:14 彼はダンの娘たちのうちのひとりの女から生まれた者であり、彼の父はツロの人です。彼は、あなたの熟練工と、あなたの父、私の主ダビデの熟練工とともに、金、銀、青銅、鉄、石材、木材の細工を心得、紫、青、白亜麻布、紅などの製造を心得、彼にゆだねられたあらゆる種類の彫り物を刻み、彼の創案に任されたすべてのものを巧みに設計することのできる男です。2:15 今、私の主が語られた小麦と大麦、油とぶどう酒を、そのしもべたちにお送りください。2:16 私たちのほうでは、お入用なだけレバノンから木材を切り、これをいかだに組んで、海路をヤッフォまであなたのもとにお届けします。そこからあなたがこれをエルサレムに運び上げてください。」

同一の名前ですが、フラムという熟練工がいます。彼は半分イスラエル人です。細工や彫り物にすぐれています。それから、木材は、今のレバノンにあるツロから地中海の上にかだによって南に動かし、ヤッフォという港に着かせます。新約聖書ではヨッパです。そこからエルサレムまでは、車で高速道路で一時間半ぐらいの距離です。

2:17 ソロモンは、彼の父ダビデが行なった人口調査の後、イスラエルの地にいる在留異国人全員の人数を調べたが、十五万三千六百人いた。2:18 彼は、その中から七万人を荷役人夫に、八万人を山で石を切り出す者に、三千六百人を民の労働を指揮する者にした。

ソロモンは、労働者としてイスラエル人ではなく在留異国人を雇いました。このように、ツロの者たちや在留異国人によって神殿が造られていきます。この姿は、イスラエル人と異邦人のある平和を表しており、後に異邦人自身も主ご自身をあがめるようになることの予兆です。終わりの日のエルサレムの一部を読んでみます。「外国人もあなたの城壁を建て直し、その王たちもあなたに仕える。実に、わたしは怒って、あなたを打ったが、恵みをもって、あなたをあわれんだ。あなたの門はいつも開かれ、昼も夜も閉じられない。国々の財宝があなたのところに運ばれ、その王たちが導かれて来るためである。あなたに仕えない国民や王国は滅び、これらの国々は荒廃する。レバノンの栄光は、もみの木、すずかけ、桧も、共に、あなたのもとに来て、わたしの聖所を美しくする。わたしは、わたしの足台を尊くする。(イザヤ 60:10-13)」

すばらしいですね、ソロモンに与えられていた知恵とは、このような異邦人の王との平和をもたらす知恵であり、異邦人が主をあがめる知恵でありました。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。(エペソ 2:14-15)」この二つとは、ユダヤ人と異邦人のことです。キリストご自身にこの二つを一つにする知恵が隠されていました。私たちもこの方に満たされる時に、ばらばらであったものが一つにされます。

2A 神殿建設の模様 3-4

1B 神殿内部 3

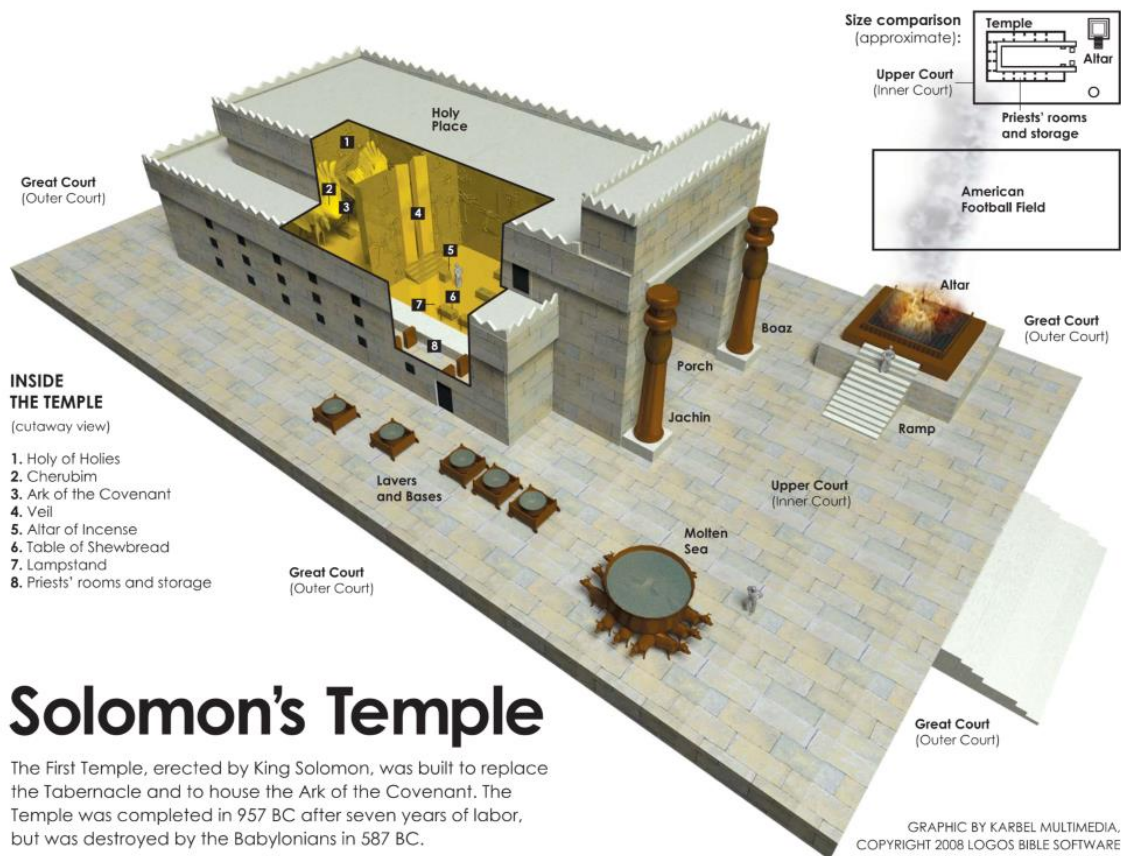
3:1 こうして、ソロモンは、主がその父ダビデにご自身を現わされた所、すなわちエルサレムのモリヤ山上で主の家の建設に取りかかった。彼はそのため、エブス人オルナンの打ち場にある、ダビデの指定した所に、場所を定めた。3:2 彼が建設に取りかかったのは、その治世の第四年、第二の月の二日であった。

ソロモンが行ったのは、すべて父ダビデが言われるとおりのことでした。神殿の場所もそうですし、これから読む神殿の構造も、すべてダビデが御霊によって書いた仕様書に従っているものです。そして2章のフラムとの友好関係も、ダビデより受け継いでいるものでした。王位が変われば、新しいことをやりたいと思って、いろいろ変えてしまうのが常ですが、ソロモンはそのまま受け継ぐ知恵が与えられていました。

使徒パウロがテモテに対して、「あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。(1テモテ 1:13-14)」と言いました。パウロから聞いた教えを手本とし、聖霊によってそれを守るのです。またコリントにある教会に対して、「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。(1コリント 11:1)」と言いました。パウロがキリスト者として行っていたことを、そのまま手本にしていきなさい、ということです。私たちはとかく、新しいことをしたがりです。しかし、そのまま受け継ぐところにある知恵があります。

3:3 神の家を建てるために、ソロモンの据えた礎は次のとおりである。長さは先代の尺度のキュビトにしたがって六十キュビト。幅は二十キュビト。3:4 前の玄関は、長さが神殿の幅と同じ二十キュビト、高さは百二十キュビトとし、その内側には純金を着せた。3:5 この大きな家はもみの木材でおおい、良質の金を着せ、さらに、その上になつめやしの木の彫刻と鎖を置き、3:6 宝石の装飾でこの神殿をおおった。ここに用いた金はパルワイムの金であった。3:7 この神殿の梁にも、敷居にも、壁にも、とびらにも金を着せ、壁にはケルビムを刻んだ。

神殿の本堂の寸法です。60 キュビトは 26.4 メートル、20 キュビトは 8.8 メートルです。モーセの幕屋のちょうど二倍になっています。キュビトは、手の指先から肘までの距離で約 44 センチです。大事なはその倍数です。一対三になっています。そしてモーセの幕屋とは異なり、玄関があります。高さが百二十キュビトとありますが、多くの聖書学者は二十キュビトではなかったのかと言っています。



Solomon's Temple

The First Temple, erected by King Solomon, was built to replace the Tabernacle and to house the Ark of the Covenant. The Temple was completed in 957 BC after seven years of labor, but was destroyed by the Babylonians in 587 BC.

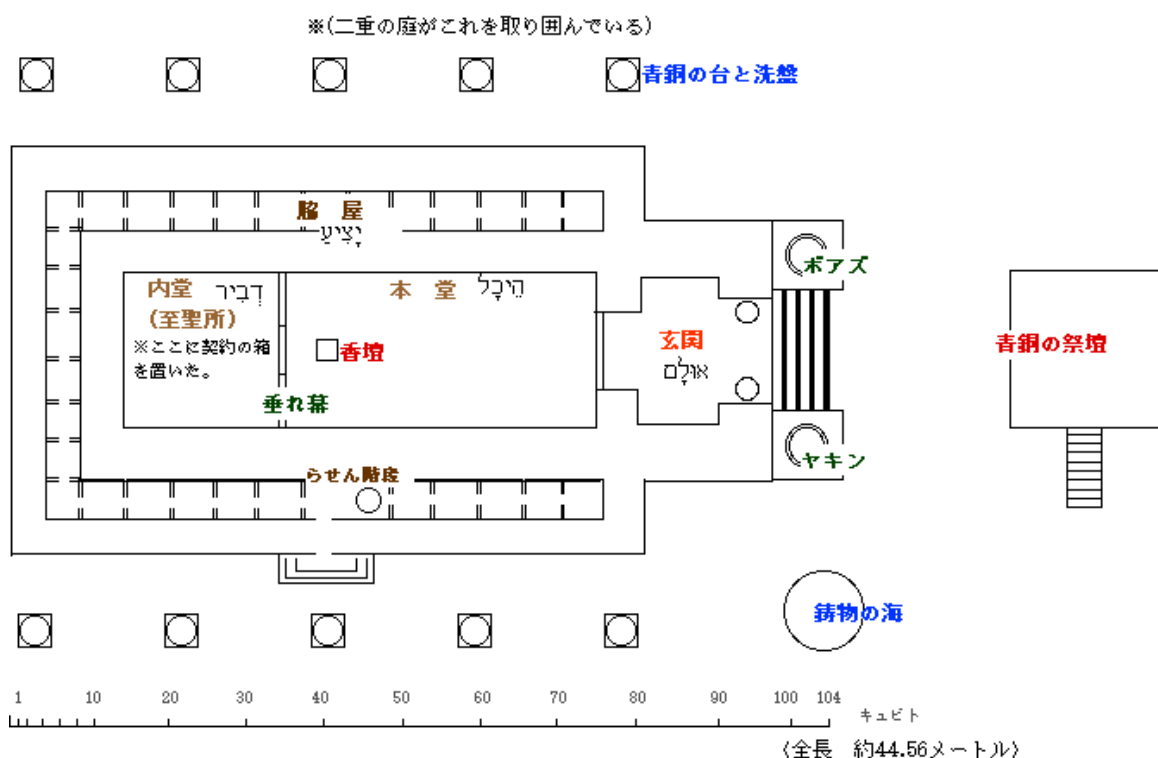
そして、内側はみな板張りで、金で覆われています。主の御座の栄光を表しています。そしてその板には、ケルビムが彫られています。かつては、幕にケルビムが織り込まれていましたが、ケルビムは主の御座のすぐそばで礼拝をつかさどる最高級の天使です。神殿全体が礼拝をすべく導いています。さらに興味深いのは、なつめやしの木の彫り物がされていることです。これは、乾燥した地においても、まっすぐに育つ、背の高い植物で、栄養価のある実をたくさん結ばせます。いのちの木を象徴しているのではないかとされています。エデンの園や新しいエルサレムにあるいのちの木です。

3:8 ついで、至聖所を造ったが、その長さはこの神殿の幅と同じ二十キュビト、その幅も二十キュビトとし、これに六百タラントに当たる良質の金を着せた。3:9 釘の重さは金五十シェケルであった。屋上の間にも金を着せた。3:10 至聖所の中に、鑄物のケルビムを二つ作り、これに金を着せた。3:11 そのケルビムの翼は、長さが二十キュビトあった。一方のケルブの一つの翼は五キュビトであって、神殿の壁にまで届いており、片方の翼も五キュビトであって、他方のケルブの翼にまで届いていた。3:12 もう一方のケルブの一つの翼も五キュビトであって、神殿の壁にまで届いており、片方の翼も五キュビトであって、他方のケルブの翼につながっていた。3:13 これらのケルビムの翼は、広げられており、二十キュビトあった。これらは、その足で立ち、その顔は神殿のほうに向いていた。3:14 それから彼は、青、紫、紅、および白亜麻布の垂れ幕を作り、その上にケルビムの模様を縫いつけた。

至聖所はなんと、600 タラント、20.4 トンの金が使われています。釘も金です。そして契約の箱の上

のケルビムだけでなく、大きなケルビムが二つ存在します。モーセの幕屋と異なり、もうここは動くことはありません。ですから、天における神の御座を表すためにありったけの金による装飾をほどこしています。そして聖所と至聖所を仕切る垂れ幕は、モーセの幕屋と同じように、青、紅、紫、そして白の亜麻布でできています。

〈ソロモン神殿見取り図〉 (列王記上6章による)



3:15 彼は、神殿の前に柱を二本作った。三十五キュビトの高さのもので、その頂にある柱頭は五キュビトであった。3:16 さらに、彼は内堂に鎖を作り、これを柱の頂に取りつけ、ざくろを百作り、鎖のところに取りつけた。3:17 それから、彼はこれらの柱を本堂の前に、一つを右側に、もう一つを左側に立てた。右側の柱にヤキンという名をつけ、左側の柱にポアズという名をつけた。

ソロモンの神殿で特徴的なのは、この二つの青銅の柱が玄関のところにあることです。ポアズは、「力をもって」という意味で、ヤキンが「彼は設立する」という意味です。

2B 庭 4

4:1 さらに、青銅の祭壇を作った。その長さは二十キュビト、幅も二十キュビト、高さは十キュビトであった。

神の家を囲んでいる庭です。青銅の祭壇は神殿の前にあります。(図では横にずれていますが、実際は神殿の正面にあります。)形はモーセの幕屋と同じように正方形ですが、ずっと長さ、幅ともに

四倍になっています。そして高さが圧倒的に高いです。階段があったものと思われます。

4:2 それから、鑄物の海を作った。縁から縁まで十キュビト。円形で、その高さは五キュビト。その周囲は細なわで巻いて三十キュビトであった。4:3 その下に沿って、牛の型が回りを取り巻いていた。すなわち、一キュビトにつき十ずつの割りでその海の周囲を取り巻いていた。この牛は二段になっており、海を鑄たときに鑄込んだものである。4:4 これは、十二頭の牛の上に据えられていた。三頭は北を向き、三頭は西を向き、三頭は南を向き、三頭は東を向いていた。この海は、これらの牛の上に載せられており、牛の後部はすべて内側に向いていた。4:5 その海の厚さは一手幅あり、その縁は、杯の縁のようにゆりの花の形をしていた。その容量は三千バテであった。

鑄物の海ですが、かつてモーセの幕屋では祭司たちが聖所に入る前に洗盤で手足を清めていたのと、同じ役割を果たします。特徴的なのは、この海を十二頭の牛が支えていることです。南北東西に三頭ずついます。ちょうどイスラエル十二部族が、荒野の旅の宿営の配置に似ています。そして牛はもちろん、いけにえにささげる牛を象徴しているのでしょう。これらのいけにえから出てくる水によって、祭司たちは手足を洗っていました。

そして興味深いのは、ゆりの花の形をしている縁があります。イエス様は、野のゆりを見なさいと弟子たちに言われて、「栄華をきわめたソロモンでさえ、このような花の一つほども着飾ってはいませんでした。(マタイ 6:29)」と言いました。確かにゆりの花はソロモンの栄華の中にあっただけですが、それはあくまでも彫ったものであり、実際のゆりには勝てません。

4:6 それから、洗盤を十個作り、五個を右側に、五個を左側に置いた。その中で洗うためである。全焼のいけにえに用いるものは、その中ですすぎ清めた。海は祭司たちがその中で身を洗うためのものであった。

十個の洗盤はモーセの幕屋にはなかったものです。いけにえの動物を洗うためのものです。

4:7 さらに、金の燭台十個を、規格どおりに作って、本堂の中に置き、五個を右側に、五個を左側に置いた。4:8 机を十個作り、本堂の中に置き、五個を右側に、五個を左側に置いた。それから、金の鉢を百個作った。4:9 さらに、祭司たちの庭と大庭およびその庭の戸を作り、その戸に青銅を着せた。4:10 海は右側、すなわち、東南の方角に置いた。

金の燭台は、モーセの幕屋の時は一本ですが、ソロモンの神殿においては十本もあります。そして供えのパンの机も一個だけだったのが、十個も行くことになります。そして庭には戸がありますが、それは青銅で造りました。そして青銅は、祭壇と神殿の間、南側のほうに置かれます。

4:11 さらに、フラムは灰つぼと十能と鉢を作った。こうして、フラムは神の宮のためにソロモン王が注文した仕事を完成した。4:12 すなわち、二本の柱と、二本の柱の頂にある丸い柱頭、および、柱

の頂にある丸い二つの柱頭をおおう二つの格子網、4:13 また、二つの格子網に取りつけた四百のざくろ、すなわち、柱の先端にある丸い二つの柱頭をおおうそれぞれの格子網のための二段のざくろ。4:14 また、台を作り、またその台の上の洗盤を作り、4:15 一つの海と、その下の十二頭の牛、4:16 また、灰つぼと十能と肉刺し、およびそれらに属するすべての用具を、ソロモン王の注文により主の宮のために、彼の職人の長フラムがみがき上げた青銅で作った。4:17 王は、ヨルダンの低地、スコテとツエレダとの間の粘土層の地で、これらを鑄造した。4:18 こうして、ソロモンはこれらすべての用具を大量に作った。青銅の重さは量りきれなかった。

ソロモンは、フラムに非常に精巧な青銅で出来たものを作るように頼みました。そして、それを行ったのは、ヨルダンの低地、スコテとツエレダの間とありますが、ちょうどシエケムと同じ緯度ぐらいにあるヨルダン渓谷のところですよ。そして青銅はあまりにも大量であり、量りきれないと強調しています。

4:19 ついで、ソロモンは神の宮にあるすべての用具を作った。すなわち、金の祭壇と供えのパンを載せる机、4:20 内堂の前で火をとますための燭台と、その上のともしび皿を規格どおりに純金で作った。4:21 さらに、金の花模様、ともしび皿、心切りばさみ。この金は混じりけのない純金であった。4:22 また、心取りばさみ、鉢、平皿、火皿を純金で作った。また、神殿の開き戸は、至聖所に通じるとびらも、本堂に通じる神殿のとびらも、金で作った。

ここで強調されているのは、金が多用されていることです。すべて純金で作っています。モーセの幕屋の時は供えのパンの机は、アカシヤ材で作ったものに金をおおいましたが、すべてを純金で作っています。そこから、扉までを金で作っています。

ここまで著者が神殿の構造と内容を書いてきましたが、ここで強調しているのは、神殿の永続性です。ここに主がとこしえに住まわれることを強く言い表しています。ですから、安息となりえるのです。メシヤが到来したら、この方が王であり、かつ祭司であります。地上におけるメシヤの国が、平和そして安息を表していることは言うまでもありません。

3A 神の箱の移動 5

ついに工事が完成しました。

5:1 こうして、ソロモンが主の宮のためにしたすべての工事が完成した。そこで、ソロモンは父ダビデが聖別した物、すなわち、銀、金、各種の器具類を運び入れ、神の宮の宝物倉に納めた。5:2 そのとき、ソロモンはイスラエルの長老たち、およびイスラエル人の部族のかしらたちと一族の長たちをすべて、エルサレムに召集した。ダビデの町シオンから主の契約の箱を運び上げるためであった。5:3 イスラエルのすべての人々は、第七の新月の祭りに王のもとに集まった。5:4 こうして、イスラエルの長老全員が到着したところで、レビ人たちは箱をにない、5:5 箱と会見の天幕と天幕にあったすべての聖なる用具とを運び上った。これらのものを祭司たち、レビ人たちが運び上った。5:6 ソロモン王と彼のところに集まったイスラエルの全会衆は、箱の前に行き、羊や牛の群れをいけにえとしてささげ

たが、その数があまりに多くて数えることも調べることもできなかった。

覚えていますか、ダビデは生前になるべくたくさんの金銀の器具類を聖別し、神に捧げました。それを新しく建てた神殿に付随している宝物倉の中に入れました。そして、ダビデの町にある、天幕にある契約の箱を運び入れます。それから、ギブオンにあったモーセの幕屋の聖なる器具もレビ人が運び上ってきました。そして時は第七です。ちょうどラツパの吹き鳴らされる日、贖罪日、それから仮庵の祭りのある月です。仮庵の祭りにちなんで、盛大に火によるいけにえによってこのことを祝います。

5:7 それから、祭司たちは主の契約の箱を、定め場所、すなわち神殿の内堂である至聖所のケルビムの翼の下に運び入れた。5:8 ケルビムは箱の所の上に翼を広げた。ケルビムは箱とそのかつぎ棒とを上からおおった。5:9 そのかつぎ棒は長かったので、棒の先が内堂の前の聖所から見えていたが、外からは見えなかった。それは、今日までそこにある。5:10 箱の中には、二枚の板のほかには何もはいていなかった。これは、イスラエル人がエジプトから出て来たとき、主が彼らと契約を結ばれたときに、モーセがホレブで入れたものである。

至聖所の中にいれました。9 節に「今日までそこにある」と書いてありますが、おそらく帰還民は、過去の文献をそのまま引用しただけなのだと思います。なぜなら、バビロンによって神殿が破壊された時に箱はどこかに消えてしまったからです。そして、その箱にあるものを強調しています。

5:11 祭司たちが聖所から出て来たとき、…列席したすべての祭司が各組の務めの順序にかかわらず身を聖別した。5:12 また、歌うたいであるレビ人全員も、すなわち、アサフもヘマンもエドトンも彼らの子らも彼らの兄弟たちも、白垂麻布を身にまとい、シンバル、十弦の琴および立琴を手にして、祭壇の東側に立ち、百二十人の祭司たちも彼らとともにいて、ラツパを吹き鳴らしていた。…

すべてのイスラエル人が集まってきています。そして、祭司たち、レビ人たちも全員が来ています。覚えていますか彼らは二十四組に分けられていますから、一会に集まることはなかったのです。けれども今は、神殿を奉献するのです。全員が集まり、そして賛美を奏でました。

5:13 ラツパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえた。そして、ラツパとシンバルとさまざまな楽器をかなでて声をあげ、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」と主に向かって賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。5:14 祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立つて仕えることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである。

驚くべき光景です。栄光の雲が宮に満ちて、祭司たちが入れなくなりました。この雲については後で説明しますが、大事なのは「ラツパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ」というところです。一つになっていたことということです。ここに、ソロモンの

知恵の実が結ばれています。平和であり、そして一致なのです。

ローマ 15 章 5-6 節を読みます。「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようになさいますように。それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。」歌声を一つにするのは、私たちが合唱して、ちゃんとハモらせることとは全然違います。そうではなく、心が一つになること、その前に忍耐と励ましによって、互いに同じ思いを持つことなのです。表面的に取り繕うにして一つになっていることが一致なのではありません。意見をすり合わせて一つになることでも決してありません。上からの賜物があたえられ、キリストの知恵によって私たちが神秘的に一つになっていることを享受することです。

イエス様が死なれる前に、父なる神に対して祈られた「一つになる」ということは、教会がそれを具現化するのです。エペソ 4 章 1-6 節を読みます。「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽し、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの中におられる、すべてのものの父なる神は一つです。」私たちは、キリストに召されています。その召しにふさわしい歩みとは、「一つ」になること、それはこれから築きあげるのではなく、御霊によって与えられている一致を、自分をキリストに服従させることによって保つことでもあります。これを私たちの肉、高慢であるとか、赦さない心であるとか、人を受け入れない心であるとか、無関心であるとか、そのようなものによって妨げてはいけません。

そして続けてエペソ 4 章で、どのようにすれば御霊の一致を保てるのか話していますが、「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建てるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。(11-13 節)」教会に、指導者の賜物を神は与えておられます。その指導者が教えることによって、聖徒が奉仕の働きに整えられたものとなっていきます。そうすると、信仰の一致と神の御子に関する一致とに達するのです。そして、キリストの大人になることができます。

したがって、午前中も話しましたが、自分個人だけを考えた信仰生活、自分が素養を身につけてキリストに近づくものになるのだという考えは、神の御心では全くないのです！そして、「私」というものがなくなり、一つになるときに「キリスト」が浮き彫りにされ、神に栄光が帰せられます。

そして、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」の歌詞は、詩篇に数多く出てくるものです。「慈しみ深い」というのは、「良い」という意味です。主が天地を創造されて、「これは良かつ

た」と言われましたが、その言葉と同じです。神は良い方だ、善なる方だということです。そして、「恵み」はヘセドです。主の愛の真実です。神が良くしてくださり、やらなくても良いことまでも行ってくださり、真実を尽くしてください。それがとこしえまで続く、と歌っています。

そして、「雲」が満ちています。神の栄光を表しています。しかも、神の御座にある栄光、シェキナーと呼ばれる栄光です。栄光の元々の意味は「重さ」です。引力の法則で、重いところに物が集まるように、集められるところが栄光と言えます。イスラエルの民は、シナイの山で主が降りてこられる時から雲を見ていました。そして荒野の旅でも、雲の柱があり、そしてモーセの幕屋ができた時にも雲が満ちました。幕屋の入口にも雲が、また至聖所のところにも雲が立ち込めました。

そして、マリヤが処女懐胎した時、ガブリエルはこう言いました。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。(ルカ 1:35)」この「おおう」という言葉にも雲が暗示されています。そして、もちろん、イエス・キリストは天から戻ってこられる時に、雲に乗ってこられるのです。

ところで、ヘブル人への手紙 12 章 1 章には、「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまとわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」とあります。ヘブル 11 章に書いてある、アダムの子アベルの時から数々の証しです。これらの証しがあり、それが雲のように取り巻いている、すなわち聖徒たちの証しによって、私たちの信仰の創始者であり、完成者であるキリストの栄光が表れているのです。

私たちは彼らの証しによって、励ましを受け、そして今の困難を忍耐することができ、罪と戦うことができます。そして、私たちは互いがキリストを分かち合うことによって、キリストを見上げることができるのです。